

日本の伝統文化（音楽）を楽しく学ぶための音楽科学習指導の在り方 ～施設一体型小中一貫校における縦断的・横断的指導を通して～

春日学園 つくば市立春日小学校 教諭 佐々木香織

1 主題設定の理由

文部科学省は、児童生徒の学習指導上、生徒指導上の様々な課題の解決を図るために、校種間の柔軟な連携の在り方を提唱している。特に小中一貫教育実施における教育課程の編成については次のような留意を指摘している¹。

小中一貫教育の実施に当たっては、小学校と中学校の教育課程の系統性を確保していくことが重要であり、そのためには、小・中学校教員が互いの学校の教育課程を理解することが求められる。具体的には（著者中略）学力観、授業観を一貫したものとすることで、系統性の担保につなげていくことが考えられる。（文部科学省 2012）

一方、学校教育の場に限らず、我が国の伝統文化の学習を重視する姿勢にあることは周知のとおりである。

本研究では、小中一貫教育だからこそ効果的に実施できる伝統文化学習について検討するものであるが、この研究主題設定の理由は次の4点に基づく。

- (1) つくば市の取り組む小中一貫教育において、今年度は「ステップ4 一貫強化期」とされ、学習指導においては、学習系統表の作成・実践や小中教員による TT 授業に加え、授業改善メソッド等の改善・充実が求められている。また本市の特色ある教育として、9年間の「学びの連続性」を大切にしたい授業づくりが推進されている。本研究では、伝統音楽学習における連続的・系統的な縦断的指導と教科間の横断的指導を試みるものであるが、それは9年間の連続した学びを活用することにより有効な学習が実現できると考えたからである。
- (2) つくば市は、外国人居住率が日本全体の2倍であり、国際都市と呼ばれて久しい。このような国際都市に居住する児童・生徒だからこそ、我が国の文化への理解と愛着を育てる必要があり、市内の児童・生徒にとって価値ある学習と考える。それには箏という比較的演奏しやすく、日本音楽を代表する楽器が適していると考えた。
- (3) 伝統音楽と社会科との合科的な学習における相乗的教育効果は、音楽を単に「鳴り響く音」として学習するのではなく「社会や歴史との関連から捉える」ことで、社会的脈絡の中の「音、音楽」としての学習が深まることにある。また、社会科の学習という点では学習内容である「歴史的事実や社会的事象」が音楽とどのように関わっているかを理解することで、学習内容の具体的なイメージ化や音楽を通じた文化史として社会科学習が可能になることである。
- (4) つくば市の推進する「学びのイノベーション」においては、ICT 機器の利活用が強化されている。ICT 機器を用いた授業で肝要なことは、ICT 機器を用いることによって授業がより活性化、明確化、効率化し学習に寄与することであることはよく指摘されるところである。本研究での ICT 機器の活用は、音という目に見えない学習内容を「可視化」させ、より一層学習内容の理解を助勢するために行う。

以上の点を踏まえ、本研究では、和楽器を使った9年間の系統性ある授業実践（縦断的指導）と、第6学年の社会科と音楽科の合科的な授業実践（横断的指導）について考察する。

2 基本的な考え方

(1) 日本の伝統音楽への理解と親しみ

我が国の音楽については、中央教育審議会答申や学習指導要領で以下のように示されており、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が一層求められていることが分かる。

国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする²。

唱歌や民謡、郷土に伝わるうたについて、更に取り上げられるようにするとともに、歌唱共通教材の扱いについて充実を図る。鑑賞教材の選択の観点については、現行で高学年で位置付けられている我が国の音楽について中学年でも取り扱うなどの改善を図る³。

和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること⁴。

第5学年及び第6学年で取り上げる旋律楽器は、既習の楽器を含めて、電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器などの中から学校や児童に実態を考慮して選択すること⁵。

上記のように、日本の伝統音楽学習をする意義や内容について示されているが、音楽の教師としては、次の加藤(2002)の指摘を理解しておきたい⁶。

学校で邦楽をなぜ教えるのか？この問いへの答えはとても簡単です。それは、自分たちの国の音楽だからです。音楽教育は、本来、それぞれの子どもたちがもち合わせている固有の音楽性を大切に、それを育てていくことを目的としているはずで、また一方で、教育には、これまでに受け継がれてきた自分たちの文化を継承・発展させていくという働きもあるはずで、私たちは日本人としての固有の音楽性を誰もが備えています。それは日本語を話し、さまざまな面で日本らしさを備えた暮らし方をしていく音楽性といってよいでしょう。この、もともと私たちが備えている日本人らしい音楽性を大切に、それを育み伸ばしていくことは、日本の子どもたちの音楽教育の基本なのです。

日本の伝統音楽を学習する意義は、音楽教師の納得するところであるが、その具体的な指導方法の困難さについては多々指摘されている。それらを整理すると次のような意見である。①音楽教師がこれまで日本音楽の指導方法について学んでこなかったこと等の、教員養成からの問題点。②多種多様な日本伝統音楽において、どの音楽ジャンルを学習させるか、またひとつのジャンルを選択できたとしても、それらは、一朝一夕の指導では学習者の理解が得られるものではない。③伝統音楽を単に「音」として学習するのではなく、日本の長い歴史や文化と併せて学習する必要がある。

上記3点のうち、②と③については、9年という連続的な学びが保証され教科間での連携が円滑に図れる小中一貫教育だからこそ、有意義で効果的な学習が可能になる。

(2) 楽しく学ぶ姿

西園(2003)は音楽における「楽しさ」を、「音楽を認識したとき」「技能を習得したことによる楽しさ」「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」の三つにまと

めている⁷。これを受けて本研究では、「楽しく学ぶ姿」を次の3点と考えた。

ア 音を中心とした体験や理解により、音楽に対して興味・関心が高まっている姿

イ 音楽表現の技能が向上し、よりよい表現を主体的に求めようとしている姿

ウ 共に演奏したり、音楽のよさや面白さを伝え合ったりする中で共感し合っている姿

(3) 縦断的指導

9年間の系統的な学習指導とは、学習指導要領に沿って授業を行っていくことであり、それは、音楽科の目標を1年生から9年生まで繋げることにより明確になる(図1)。さらに、題材ごとに9年間の系統性を明確にし、系統表として作成したものの一つが表1である。本研究ではこのような系統的な指導を縦断的指導と定義付ける。

なお、表1は、箏を教具とした題材の指導の計画ある。

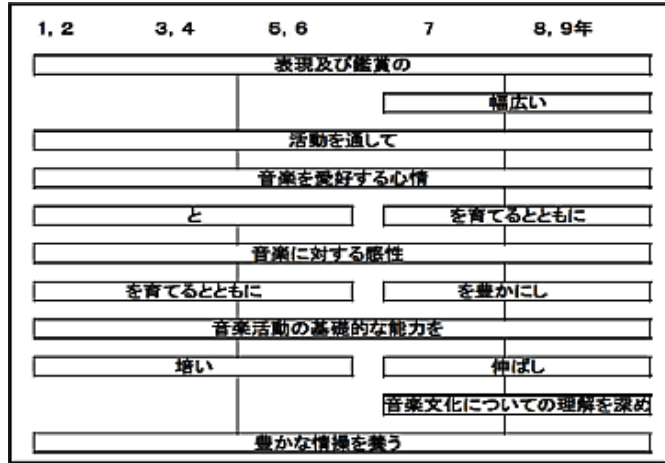


図1 9年間の目標のつながり

年題材名	曲名	箏を入れるふし	具体的活動内容・留意点
1おこ 年おへ んじ しょう	なまえあそび	「〇〇さん」 「はーい」	実音「AGA」のくり返し 七と八の糸にのみ柱を立て、指ではじきながら歌う。
2おこ 年かく れん ぼしょう	かくれんぼ	「もういいかい」 「まあだだよ」 「もういいかい」 「もういいよ」	実音「GHA」のくり返し 七八九の糸にのみ柱を立て、指ではじきながら歌う。
3おこ 年ばん そう しょう	うさぎ	「うさぎうさぎ なにみてはねる」	指ではじいて歌の伴奏をする。実音「FFAHAH」をオスティナートとして4回くりかえし、最後は「H」を加える。六七八の糸に柱を立てる。
4民よ うに 年伴奏 をつ けよう	こきりこ 鑑 さくらさくら	「デデレコデン」	指ではじいて歌の伴奏をする。「GGGFG」と2拍ずつの低音「GD」をオスティナートとする。一二六七の糸に柱を立てる
5こと 年に 親 しもう	「箏での音楽遊び」	いろいろな音の出し方を探して、即興的な音楽づくりを行う。	
	さくらさくら	全フレーズ	爪をつけて演奏する。(平調子)
6箏の 年の音 重なり を 楽しもう	越天楽今様 鑑 荒城の月	全フレーズ	爪をつけて演奏し、旋律に合わせて「一二三」「三五」(2拍ずつ)のオスティナートを指ではじいて入れる。(乃木調子)
7箏の 年の余韻 を楽し もう	六段の調べ	初段の1～3小節	鑑賞し、口唱歌をした後、引き色や押し手による余韻の変化を楽しみながら演奏する。(平調子)
8箏の 年の旋律 をつ くろう	荒城の月	全フレーズ	平調子の四を一音上げて演奏する。その後、同じ2部形式を使って、平調子の簡単な旋律を作る。
9合奏 年の曲 を創 作し 演奏 しよう	さくらさくら	「さくら変奏曲」を鑑賞した後、箏譜製作用のソフトを使って「さくらさくら」の2面の箏による合奏曲を創作する。前奏・副旋律・後奏を作り、主旋律との合奏をする。	

表1 箏を教具とした題材の系統表

この系統表を作成するにあたり、留意した点は次の3点である。

- ・ どの教員でも無理なく指導できるよう教科書の題材や楽曲を使用すること。
- ・ 児童生徒が抵抗なく学習できるよう，使う音の数やフレーズを少しずつ増やすこと。
- ・ 器楽の活動だけでなく，歌唱や創作の活動でも取り入れること。

(3) 教科間の横断的指導

文部科学省では教科間の連携について次のように述べている⁸。本研究ではこのような教科間での連携を図った指導を横断的指導と定義付ける。

ア 音楽科の視点から見た効果

音楽の授業のガイダンスにおいて，音や音楽が生活に果たす効果的な役割を考えたりするなど，音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるように計画的な指導に取り組むことが大切です。
 更には，鑑賞の授業において，特に社会科，美術科との連携を図り，それぞれの音楽を生み出しはぐくんできた文化・歴史，他の芸術とのかかわりなどの，学習を深めることも大切です。

社会科の進度に合わせて，その当時の人々の音楽を想像したり，演奏したり，創作したり，鑑賞したりする。このように，社会科との関連で音楽を学習することで，伝統音楽の学習を音を通して学ぶだけではなく，「その音が置かれていた社会的，文化的な脈絡の中で音や音楽を認識すること」が可能となり，より深い理解へとつながる。このことについて山口(1988)は次のように述べている⁹。

音楽は人しかもたない文化であり，それは各民族の生活や思想と結びついているものである。よってひとつの音楽の社会的脈絡のなかで考え，調べ，さらに経験することは，それぞれの民族の生活，生き方，思想を知ることにもなるのである。

イ 社会科の視点から見た効果

社会科の指導内容を音楽とを結び付けることによって，単に「時代的な流れ」を学ぶだけではなく，「生きた社会科」として体験的に学習できる。例えば，平安貴族社会について学ぶ時，貴族にとって「音楽」が必須の教養であったこと，また江戸時代においては「歌舞音曲」と庶民の関係を理解することにより，より一層，歴史を「実感」として児童・生徒に考えさせることになる。

そこで，社会科と音楽科の学習内容を関連させた学習計画を立て，実践する(表2)。

6年生社会科 単元	6年生音楽科 題材 (内容)								
1 縄文のむらから古墳のくにへ	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">想像しよう 古代の音楽</td> <td rowspan="10" style="border-left: 1px dashed black; padding: 2px;"> 〈想像〉 【音楽づくり】 平安の世を今様で表し，箏を伴奏に歌唱 【歌唱】【鑑賞】 GTを招いた「能」の鑑賞と謡の体験 【鑑賞】 「歌舞伎」「浄瑠璃」 「地歌」 【器楽】 ペリー来航時の軍楽隊の音楽を再現 </td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「今様」を作ろう</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「能」を体験しよう</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">江戸の音楽を感じよう</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">江戸と明治の音楽を比べよう</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">今のお気に入り曲を紹介しよう</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">想像しよう 未来の音楽</td> </tr> </table>	想像しよう 古代の音楽	〈想像〉 【音楽づくり】 平安の世を今様で表し，箏を伴奏に歌唱 【歌唱】【鑑賞】 GTを招いた「能」の鑑賞と謡の体験 【鑑賞】 「歌舞伎」「浄瑠璃」 「地歌」 【器楽】 ペリー来航時の軍楽隊の音楽を再現	「今様」を作ろう	「能」を体験しよう	江戸の音楽を感じよう	江戸と明治の音楽を比べよう	今のお気に入り曲を紹介しよう	想像しよう 未来の音楽
想像しよう 古代の音楽		〈想像〉 【音楽づくり】 平安の世を今様で表し，箏を伴奏に歌唱 【歌唱】【鑑賞】 GTを招いた「能」の鑑賞と謡の体験 【鑑賞】 「歌舞伎」「浄瑠璃」 「地歌」 【器楽】 ペリー来航時の軍楽隊の音楽を再現							
「今様」を作ろう									
「能」を体験しよう									
江戸の音楽を感じよう									
江戸と明治の音楽を比べよう									
今のお気に入り曲を紹介しよう									
想像しよう 未来の音楽									
2 天皇中心の国づくり									
3 武士の世の中へ									
4 今に伝わる室町文化									
5 戦国の世から江戸の世へ									
6 江戸の文化と新しい学問									
7 明治の国づくりを進めた人々									
8 世界に歩み出した日本									
9 長く続いた戦争と人々のくらし									
10 新しい日本，平和な日本へ									

表2 社会科と音楽科の関連を図った学習指導計画

この計画の作成にあたり、留意した点は、次の3点である。

- ・ 知識と経験の両方から学べるよう、鑑賞だけでなく、歌唱・器楽・音楽づくりの活動を取り入れること。
- ・ 当時の人々の生活と音楽とを重ねて理解できるよう、社会科担当教員と連携し、社会科との進捗と平行して学習できるようにすること。
- ・ 社会科の時間に作った詩に音楽科でふしをつけるなどの関連を図った学習ができるようにすること。

3 授業実践

(1) 箏を教具として使用した縦断的指導

【平成 26 年 7 月実施】

ア 題材名「おことでかくれんぼしよう」（2年生）

(ア) 指導の実際

2年生は、昨年初めて箏に触れて箏が自分の声と共に鳴ることの楽しさを味わっている。昨年より使う音を一つ増やして三本の糸に柱を立て、弾き歌いを行った。



歌いながら音を見付けている児童の様子

学習活動の内容（概略）

- うたのリズムや旋律を感じながら斉唱や交互唱をする。
かくれんぼするもの よっといで じゃんけんぽんよ あいこでしょ
「もう いいかい」「まあだだよ」「もう いいかい」「まあだだよ」
「もう いいかい」「もう いいよ」
- 「もう いいかい」からを、教師の箏の旋律に合わせて歌う。
- 「もう いいかい」「まあだだよ」「もう いいよ」の部分、教師と児童、児童同士で、歌いながら箏を弾く（ピッチカート）。
(声)「もう いい かい ・ まあ だだ よ」・
(箏) 七 九 八 ・ 七 九 八 ・
(声)「もう いい かい ・ もう いい よ」・
(箏) 七 九 八 ・ 七 九 八 ・

(イ) 授業での児童の様子（学習中の児童の発言より）

- T「お箏知っている？」
「1年生の時に弾いた。」「『は〜い』って、やった。」 昨年度の経験による興味関心※ア
「1年生の時にお兄さんお姉さんが弾いてくれた。」（校内の音楽発表会での鑑賞）
- T「どんな音がするの？」
C「お箏の音は月が見えるんだよ。」（音楽発表会での越天楽今様の3番から）
「きれいな音。」「ポロロ〜ンって。」等
- T「お箏ってね、『もういいかい』とか『まあだだよ』も、言えるんだよ。」
C「うっそ〜。」等
- T「本当だよ。聞いていてね。」（教師の弾き歌い）
C「本当だ。」「すご〜い。」「しゃべった〜。」等
- T「みんなもやってみる？」 探り始める G-H-Aの順番に気付く※イ
- C「できないよ。」「やった〜。」
「できた。」「こうやってやるんだよ。」等 技能の習得※ウ 伝え合う
- T「お箏といっしょに歌ってみよう。」

(ウ) 授業の考察

上記のような教師と児童のやりとりからも、箏への親しみが増していることが

分かる。その中でも、昨年の経験が生かされていること（※ア）や、自分たちで音を探って、ふしを見付けていく（※イ）楽しさを味わえたことは、本実践の成果の一つと考える。また、全員が三つの音を出しながら弾き歌いのできた（※ウ）ことは、興味関心だけでなく、技能の高まりと捉えることができる。

イ 題材名『『さくら合奏曲』を創作して演奏しよう』（9年生）【平成26年1月実施】

(ア) 指導の実際

- 学習活動の内容（概略）
- 1 「さくら変奏曲」を聴く。
 - 2 箏譜製作ソフトを使い、コンピュータで箏の曲をつくる。
 〈創作の条件〉
 - ・ 1人で1曲つくること
 - ・ 平調子でつくること
 - ・ 前奏、副旋律、後奏をつくること
 - ・ 押し手や引き色などの余韻の変化を入れること
 - ・ 副旋律は主旋律との音の重ね方に気を配ること
 - 3 2人（3人）で合わせて練習する。
 （本手と替手で合わせる）
 - 4 発表会をする。

これまでの学習を生かして、箏の合奏曲を創作して演奏することが本実践のゴールとしている。昨年8年生の時に箏の楽譜製作用ソフト「箏譜エディター」（2001 田中）を使用した創作をしているため、使い方には慣れていていることから、音の重ね方や余韻にポイントをしばらせた。また、つくった旋律をコンピュータに打ち込み、聞いて確かめながら創作できるようにした。

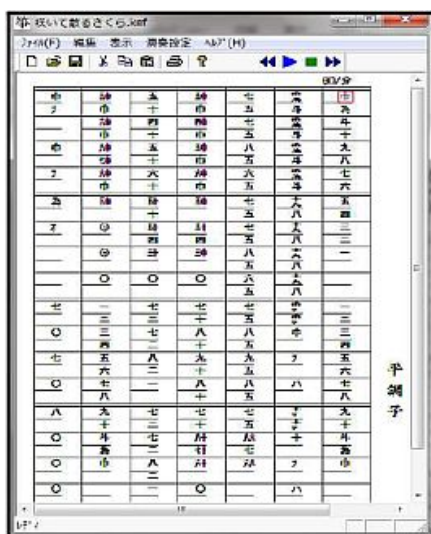
(イ) 授業での生徒の様子

「さくらさくら」の主旋律は以前の学習を思い出し、簡単に演奏することができたため、すぐに副旋律と前奏、後奏の創作に取りかかっていた。前奏と後奏は自由な長さで好きな奏法を使えるため、どの生徒もすぐに完成していた。副旋律の創作は主旋律との音の重ね方を工夫する必要があるため、何度もつくり直しながら行っていた。



コンピュータと箏を使って創作する様子

(ウ) 授業の考察



生徒が創作した箏2重奏曲

左は、生徒が創作した曲である。これまでの学習が余韻の変化や音の重ね方に表れており、創作の技能の高まりが分かる。それは、これまでの積み重ねに加え、ICT 機器の有効な活用によるものと考えられる。「箏譜エディター」は、譜面に数字を入れたらそのまま楽譜となり、すぐに再生できる。生徒は上の写真のように、思い浮かんだふしを箏で音に出し、その糸番号を打ち込み、コンピュータから出る音を聞きながら音の重ね方などを確認し、楽譜を完成させていた。また、自分とコンピュータの演奏を比べるなど、演奏方法の習得にも役立てていた。授業は、小学校籍の教員と中学校籍の教員との TT で行った。コンピュータの使い方や箏の奏法等での個別指導に有効であった。

(2) 横断的指導

ア 題材名『今様』をつくろう(6年生)【平成26年7月実施】

(ア) 指導の実際

学習活動の内容(概略)

- 1 「越天楽今様」を歌唱する。
- 2 「越天楽今様」のふしを箏で演奏し、オスティナートを入れて音の重なりを味わう。
- 3 社会科で作った歌詞にグループで旋律を付ける。
 - ・「越天楽今様」を参考にする
(拍子・使う音の構成・くり返しの使用)
 - ・箏やキーボードを使って音の並びを確かめながらつくる
- 4 発表会をする。

「貴族の世の中」の社会科の学習と平行して、当時貴族たちの間で流行した「今様」を作った。「今様」の歌詞は社会科の学習でつくり、音楽の時間にその歌詞にふしを付けた。

(イ) 児童の様子

社会科で平安の貴族の暮らしについて多くの視覚的な資料や体験を取り入れて学習したことから、平安の人になりきり、音楽づくりにも意欲的に取り組んでいた。「越天楽今様」を真似て、歌詞を七五調で作り、使う音や拍子、くり返しの使用などの条件を提示したことにより、スムーズにつくることができた。

The image shows a handwritten musical score on a grid background. At the top, it is titled '平安の人になりきって今様をつくろう' (Imagining the Heian people and creating Imayama). Below the title, there are two columns of lyrics: 'ごきげんとめ' and '三つ少納言'. The score consists of several staves with musical notation, including notes, rests, and dynamic markings. The handwriting is clear and organized.

児童のつくった今様(楽譜)

(ウ) 授業の考察

社会科で当時の貴族の生活をていねいに学習したことと、導入として共通教材である「越天楽今様」を歌ったり箏で弾いたりしたことにより、「今様」に対して親しみをもってつくることができた。また、「越天楽今様」を真似た構成を条件としたことや、上の楽譜のように枠を埋めるだけの記譜の仕方としたことにより、短期間で集中して作ることができた。発表会では、ICT機器を利用し、楽譜をスクリーンに映したことで、歌詞や音の高低や長さ、動きなどを目で捉えながら鑑賞し合うことができた。

イ 題材名「江戸と明治の音楽を比べよう」(6年生)【平成26年10月実施】

(ア) 指導の実際

長い鎖国が続いていた日本にペリー率いる黒船艦隊が開国を迫ってきたことは、社会科でも大きな出来事として取り上げた。この出来事は音楽文化においても大きな変化をもたらしたため、この変化を捉えることで、日本音楽と西洋音楽との違いを考えることに繋がった。

(イ) 児童の様子

当時の音楽を再現する活動では、曲の速さや音の大きさなどを想像し、工夫して演奏していた。また、これまでに学習してきた日本の音楽と、今回演奏した西洋の

歴史年表に音楽について記述するワークシートを使い、歴史の事象と共に当時の音楽を少しずつ追っていった。すべての音楽を扱うことは不可能であるが、歴史の教科書に載っているものなどを中心に児童が興味をもてるであろうものを取り上げた。『音楽の意味』を考え直しました」や「それぞれの歴史に楽器を演奏したり、歌ったり、おどったりする理由があっっておどろきました」などの児童の言葉から、歴史を知ることによって音楽に興味をもてたり、音楽を知ることによって歴史をより深く理解できたりすることが分かり、相乗効果があったことが見取れる。また、未来の音楽を「デジタル化」と想像したり、「でも歌や音楽は無くなってほしくない」と述べたりすることから、人と音楽との強い結び付きを理解し、音楽の伝承や変化を楽しんでいる様子が見えらる。

この学習を通して、私は「音楽の意味」というのを考え直しました。今までそれぞれの歴史に楽器を演奏したり、歌ったり、おどったりする理由があっっておどろきました。音楽というのは、神様にお願いしたり、願いを叶えるために歌ったりしていた。その時はお祭りみたいな感じで、今は時代は変わってしまいました。次に平安時代では、今様があり少し日本の音楽を感じられました。平安時代は今と同じように、楽しむことが目的でした。今のよには感じることがあります。江戸時代では歌や浄瑠璃など、劇を中心とした音楽が生まれ、私は「ミュージカルの元はここかな」と思いました。そして戦争が起きたりすると、日本を忘れる歌などがあっていました。このように私は音楽は人を楽しませるだけでなく、様々な意味があると感じました。音楽に感情をこめることができました。最後に未来の予想として、未来の音楽は機械音や映像をふくむと思います。デジタル化でも歌や楽器は無くならないと思います。

学習を終えた感想文

4 成果

本研究は、(1)9年という小中一貫教育においてこそ可能な、連続的・系統的な学習内容とその指導方法について検討すること、(2)現代の音楽科教育において最も必要とされている日本伝統音楽の指導方法について提案できること、(3)音楽科と社会科の横断的な指導によって相互の教科学習に相乗効果を創出させること、(4)音楽科教育においてあまり活用されることのない ICT 機器を効果的に用いること、の4点に主眼をおいて実施し、児童生徒が伝統音楽を楽しく学ぶための指導の在り方について研究した。その結果、次のようなことが明確となった。

- (1) 9年間という小中一貫教育では、音楽科教育の目的において、最終的に育てたい音楽的な力に長期的視野をもてるとともに、段階的な指導が可能になる。そして、系統性をもった指導により、児童生徒が無理なく自然に伝統音楽を楽しめ、連続性をもった指導により経験を生かしながら段階的に技能の向上が図れる。それらの証明については、本研究の「授業実践」の項で示したように、児童の発言等からもうかがえる。
- (2) これまで音楽科の授業で散見するような伝統楽器の「奏法」だけを学習内容にしたり、「鑑賞」だけで伝統音楽を理解したりするのではなく、音楽科の活動領域である「歌唱」「創作」「鑑賞」の各領域と関わらせながら指導することで、伝統音楽をより身近なものとしてとらえられる。また、前の学年で鑑賞した曲を次の学年で演奏するなどの関連を図ることで、経験を生かした意欲的な学習へとつながる。
- (3) 音楽科と社会科との教科間の連携を図ることで、学習内容について児童がより一層興味をもつことができる。たとえば、平安期の音楽を体験することにより、現代とは

まったく異なる音楽を愛好した平安の人々（この場合は貴族）の生活に思いをはせることができたし、また黒船来航が日本人にもたらした衝撃を音を通して実感したことにより、音楽における歴史の移り変わりなども体験を通して理解できた。

- (4) 創作の活動のツールとしても、演奏技能の習得や向上においても、ICT 機器による指導方法が大きく寄与する。特にコンピュータを使った創作では、自分の思い浮かべた旋律をコンピュータに打ち込みながら楽譜にし、コンピュータから出される音で音の重ね方などを確かめ、修正しながら効率よく完成させていた。さらに、自分の作曲した曲を実際の箏で正しく表現したいという思いから、より熱心に演奏に取り組んでいた。また、「今様」の発表会で自分たちがつくった曲の楽譜をスクリーンに映して発表できるようにしたことで、歌詞や音の動きなどを耳と目で味わいながら鑑賞でき、音の動きや曲のよさを共有し合える発表会となった。

5 課題

- (1) 9年間という長期的視野で連続的・系統的な学習指導ができるものの、そのためには教師間の連携がより重要になり、「何をいつまでにどのように指導するか」という点をより一層明確にしなければならない。
- (2) 本校は転出入の児童生徒が多いため、個に合わせたフォローアップを9年間の一貫教育の中でどのように実施するかも考えねばならない。
- (3) 横断的な授業の在り方について、それぞれの教科の独自性を保持しながらも、学習内容のどの箇所を横断的に扱うかということ、事前の教材研究で十分検討しなければならない。

【引用文献】

- 1 文部科学省：2012「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理 2 小中連携，一貫教育の推進について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325893.htm
- 2 文部科学省：2008「音楽科改訂の趣旨(i)改善の基本方針」『小学校学習指導要領解説音楽編』p3
- 3 文部科学省：2008「音楽科改訂の趣旨(ii)改善の具体的事項」『小学校学習指導要領解説音楽編』p3
- 4 文部科学省：2008『中学校学習指導要領解説音楽編』p77
- 5 文部科学省：2008『小学校学習指導要領解説音楽編』p73
- 6 加藤富美子：2002「邦楽を教える意味とその指導上の留意点」『邦楽箏始め』p18 カワイ出版
- 7 日本学校音楽教育実践学会編：2003『音楽の授業における楽しさの仕組み』p9 音楽之友社
- 8 文部科学省：2011『中学校キャリア教育の手引き』p159
- 9 山口修編：1998『楽の器』p8 弘文堂

【参考文献】

- 茨城県教育委員会：2014『平成26年度学校教育指導方針』
- つくば市教育委員会：2014『平成26年度学校教育指導方針』
- つくば市教育委員会指導課：2014『子供たちが自ら学び・考え・判断できる21世紀の教育をつくばから～学びのイノベーションを目指して～』
- 笠原 潔：2001『黒船来航と音楽』吉川弘文館
- 田中健次：2008『図解 日本音楽史』東京堂出版